［古典の旅］――⑪

おくのほそ道

田辺聖子

夏草や兵どもが夢の跡

［古典の旅］——⑪

おくのほそ道

辺聖子

講談社

古典の旅——⑪
おくのほそ道
第一刷発行　一九八九年九月一四日

著者　田辺聖子
装幀　岡村元夫
装画　王朝継ぎ紙研究会　主宰　近藤富枝
書　高野玉兎　地図　磐広人
写真　講談社写真部江頭徹
発行者　加藤勝久
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽二—一二—二一
電話(〇三)九四五—一一一一(大代表)
印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　黒柳製本株式会社
定価　一二〇〇円(本体一一六五円)

ISBN4-06-192081-2 (文1) ©Seiko Tanabe 1989 Printed in Japan
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは文芸図書第一出版部あてにお願いいたします。

おくのほそ道　目次

旅立ち……9
白河の関こえて……46
壺の碑……77
つわものどもが夢のあと……117

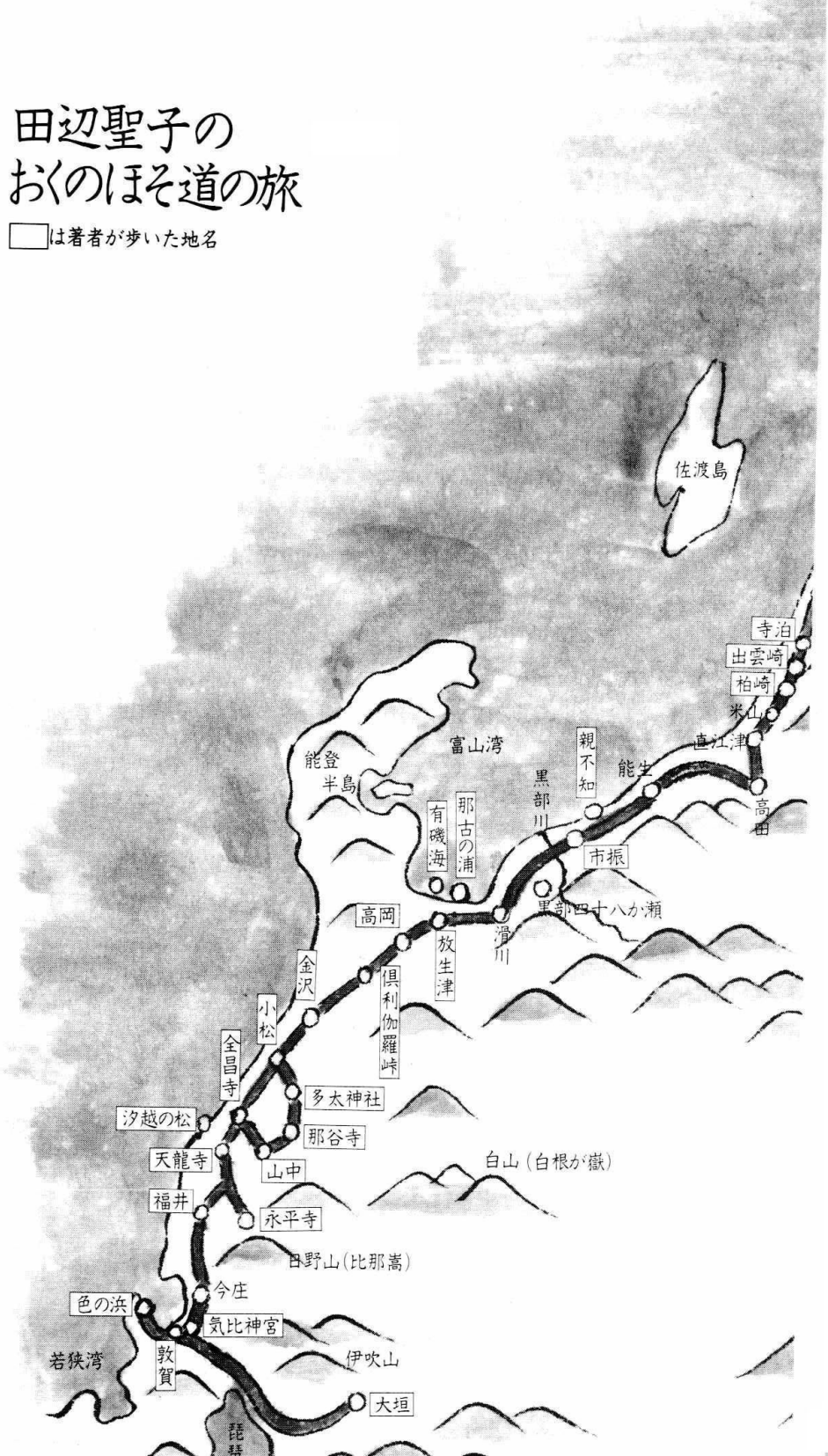
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

羽黒山の三日月……134
甲の下のきりぎりす……176
蛤のふたみの別れ……212
解説・幻想旅行記……櫻井武次郎……243

蚶満寺
鳥海山
象潟
有耶無耶関
吹浦
酒田
清川
古口
本合海
新庄
養泉寺
山刀伐峠
堺田
尿前の関
鳴子
毛越寺
中尊寺
平泉
一関
北上川
鶴岡
羽黒山
月山
大石田
尾花沢
岩手山
塩竈神社
松島
登米
石巻
温海
鼠ケ関
湯殿山
天童
壺の碑
仙台
瑞巌寺
仙台湾
葡萄峠
最上川
立石寺
名取川
笠島
岩沼
村上
築地
白石
武隈の松
阿武隈川
鐙摺
桑折
飯坂
磐梯山
新潟
医王寺
福島
文知摺石
弥彦
二本松
黒塚
日和田
猪苗代湖
郡山
安積山
須賀川
遊行柳
旗宿
殺生石
白河の関
那須湯本
芦野
雲巌寺
高久
黒髪山
裏見の滝
黒羽
日光
玉生
東照宮
鹿沼
室の八島
間々田
筑波山
春日部
草加
霞ケ浦
隅田川
千住
深川
富士山
三浦半島
房総半島

田辺聖子の
おくのほそ道の旅

□は著者が歩いた地名



おくのほそ道

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

旅立ち

1

芭蕉は旅立ちの支度をしている。

今年、元禄二年（一六八九）、芭蕉は四十六歳である。時は晩春である。

ずっと独り身で、清貧に窶れ、詩神に憑かれ、漂泊の風雲に身を苦しめてきた芭蕉は、年よりも老けて、ちょっと見たところ六十ぐらいの翁に見える。痔と疝気（胃痛）の持病があるが、強い精神力と克己心で凌いできた。どちらかというと小柄だが、筋肉質で引き緊った痩軀、意志的で謹直な表情、鋭い洞察力を秘めながら、暖いユーモアにあふれたまなざし。（それは向う人々の心を吸い取るように思われる。心ある人ならば、芭蕉に向き合ったとき、思わず彼を師と頼り、慕わずにいられない。芭蕉もまた、あらゆる人を貴賤や貧富で差別し

ない。彼の門人や弟子には、武士も町人も僧も俗もいた。路通のような浮浪者さえいた。風雅の志ある者、その才ある者を、芭蕉は区別せず愛顧した)

芭蕉は当今、江都屈指の宗匠とうたわれながら、その暮しぶりはまことに簡素である。旅の用意も手ずからいそしむ。古笠の破れに紙を貼り、柿渋を塗り、漆を塗り溜めて、笠の緒を新たにつけ替える。

股引の破れをつくろい、紙子に足袋をとり揃える。旅支度は手慣れている。すでにそれまで何度も旅を経験していた。

故郷の伊賀上野への実務的な旅は措くとしても、ここ、江戸・深川の庵からはじめて風雅を探る行脚に出たのは四十一歳の年であった。貞享元年(一六八四)で、門人・千里を伴っての、『野ざらし紀行』である。伊勢参拝を果し、故郷に帰ってその前年、亡くなった母の霊を弔い、大和から吉野、山城・近江、大垣から尾張。……九ヵ月に及ぶ長旅だった。

野ざらしを心に風のしむ身かな

行倒れて身は野辺の白骨となってもままよ、それも風狂——と思いながらの旅だった。

死にもせぬ旅寝の果てよ秋の暮

「ここに草鞋を解き、かしこに杖を捨てて、旅寝ながらに年の暮れければ」旅の風趣は芭蕉の身に沁み、佳吟を多く得、人との出逢いを楽しみ、自然の深遠な美しさに精神感応した。

二年のち今度は鹿島詣でに、ついで東海道を上って、尾張から故郷へ、初瀬、吉野、奈良から須磨への長い旅。京にもとどまり、やがて信濃の更科の月をも賞した。発った日は神無月（陰暦十月）の下旬だった。

「空定めなきけしき、身は風葉の行く末なき心地して、

旅人とわが名呼ばれん初しぐれ」

旅こそ、わが人生。

芭蕉はそう考えるようになっている。雨・嵐に悩まされ、「冬の日や馬上に凍る影法師」寒さに悩まされつつ、しかし峠で春を迎えればその絶景に目をみはり、心も明るむ。

雲雀より空にやすらふ峠かな

「旅の具多きは道さはりなりと物みな払ひ捨てたれども、夜の料にと紙子ひとつ、合羽やうの物、硯・筆・紙・薬など、昼笥なんど物に包みてうしろに背負ひたれば、いとど臑よわく力なき身の、あとざまに引かふるやうにて道なほ進まず、ただものうきことのみ多し。

草臥れて宿かる頃や藤の花」

旅の憂さを知りつくした身なのに、やはりまた、旅がしたい。

芭蕉には一つの夢がある。

みちのくへ往こう。

奥州の歌枕が、自分を呼んでいる。

まだ見ぬ土地ながら、古人の古歌に親昵して、さまざまに思い描いている歌枕の土地のたたずまい。行けばさぞ、旧知の古里のように思えるのではあるまいか。

白河の関。名取川。

末の松山。壺の碑。

その地に立てば、古人もありありと目交に現出するのではないか。敬慕してやまない西行法師や、はたまた奥のほそ道のあちこちに歌を遺した能因法師、実方中将、奥州落ちした源義経、出羽・越後・越中へ出れば倶利伽羅峠の木曽義仲、古い歴史の夢のあと。

興亡うたかたのあとを、この目で見たい。

風が呼んでいる、山河が自分を招いている、と芭蕉は思う。

自然に触れて、清新な詩魂をふるい立たせよ、と使嗾している。

芭蕉はみちのくの旅を思い立った。

自分はひとところに安住し、ぬくぬくと小成に安んじていられる人間ではないらしい。更に更に、身を削り、神を労し、「無能無芸にしてただこの一筋につながる」俳諧の道を、建立せねばならない。

芭蕉の慕わしいのは、人生を漂泊流浪して激越な詩をのこした唐土の詩人、杜甫・李白であり、旅をすみかにして生涯を終えた歌人西行や、連歌師宗祇である。

乞食行脚こそ、詩人のあるべきすがたではないか。宗祇は旅から旅へと遍歴して、「世にふるも更に時雨のやどりかな」と詠んだ。人生は時雨の宿りだというのか。

さらば自分も宗祇の時雨にぬれよう。

この笠で、宮城野の露を見にゆこう。

芭蕉は感興湧くままに、筆をとって笠のうちに書きつけた。

世にふるも更に宗祇のやどりかな

みちのくは遠い。生きて戻れるだろうか。

今までの旅のように、故郷へ立ち寄って肉親の情に甘え、しばらく滞在して英気を養い、再び廻国するということは望めない。帰る日も期し難い。

芭蕉は住み慣れた深川の庵を人に譲り、その代価を路銀の足しにするつもりでいる。足掛け七年住んだところだが、物質的欲望に乏しい芭蕉は何に対しても執着はない。

この草庵にしてからが、弟子たちの喜捨によるものだった。

延宝八年（一六八〇）三十七歳のとき、芭蕉は江戸市中の住居と、俳諧宗匠の盛名を突如抛って、まだ開けぬ辺鄙な土地の深川村へ引っ越した。そのころの深川の地は、お江戸のうちとはいえ、『深川文化史の研究』（江東区刊）によれば、寺社や武家屋敷などが散在するものの、まだ人家も少く、田畑や草原が広々と広がっていたという。水郷なので土地は低く、荻や芦がいたるところに繁っていた。

ただ、小名木川にかかる万年橋から眺める富士は美しく、隅田川を漕ぐ船の風情も興趣深

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com